

ひまわりからの メッセージ

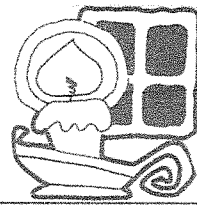
134号

2022.12.12.

NPO ひまわりの花内
西濃園域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

年の瀬を 迎えて



師走も半ばになり、年賀欠礼の葉書が毎日のように配達されて、今年はいよいよ例年に比べても多いように思います。連れ合いに「そろそろ年賀状はやめにしますか？」と提案するのですが、なかなか首を縦に振らず、自分の分は宛名印刷を「ヤッ」と終えてしまっています。印刷が苦手な私は、毎年年末にあわてて手書きすることになるのですが、私は一生の間にどれだけ文字を書くのだろうか、ふと考えました。今はパソコンという便利なものがあり、何年か前に右手首を骨折した時には一回だけパソコン打ちをしたことがありましたが結局この「ひまわりからのメッセージ」も手書きにこだわっています。私の頑固さやこだわりは相当なものだなどと、自分ながら苦笑してしまいます。文字はその人を表すと聞きます

すが、自分の書いた文字でも、その時その時の感情が垣間見えて、乱れた文字や右上がりの文字、一行がまっすぐに書き進めていない等々面白いものだと思います。人と人の関わりが希薄になり、葉書や手紙を書く機会も少なくなったのでしょう。切手を貼る理由を知らない子どもたちが多いことに驚かされる私です。しかし、この私でさえも文を書くことがめっきり少なくなりました。ところで、この一年、皆さんにとってどのような一年だったのでしょうか。おそろしく様々な出来事があり、悩まれたり、苦しまれたりすることも多かったのではないのでしょうか。世間では、保育園や福祉施設での虐待が跡を絶ちません。これでもか、これでもかと次々に発覚する心ない行為に対して心を痛め批判することはできても一人一人の心の中に存在する差別意識や優生保護の考え方を変えていくことの難しさを思います。庭先では、佗助がピンクの花を咲かせました。一輪一輪、ピンクの濃淡が違って、自然が作り出す花のおやかなあなたかいい色合いに、ほっと心が和みます。さて、来る年は、どんな年になるのでしょうか。子ども達が愛情に包まれて育ってほしいと思います。人のあたたかさを肌で感じて、自分も他人も大切にできる人になってほしいと切に願っています。どうか佳き年でありますように……と祈りつつ……。

LD学会の報告

前号につづいてLD学会(京都大会)の発表内容について、書くことにします。ただオンラインでの受講のため、私の理解度の問題もあって十分な解説ができない点についてはお許し下さい。

大学生の就労支援について

(京都大学 村田淳先生)



日本全国の大学において、障害があると見られる学生は二〇二二年には、四〇七四名で、十五年前に比べて三万五千人ほど増えているそうです。診断が明確になっている人数は、ASD(自閉スペクトラム症)の学生が一番多く、次いでADHD(注意欠如多動症)、SLD(限局性学習症)となっています。重複もかなりの数が含まれています。しかし、一概に発達障害のある大学生と言うことには疑問があり、困りのある学生は発達障害の生徒以上に多いと考えられることでした。ただ、発達障害の学生が四年間で卒業できない割合は高く、就労率も低く、一般雇用されても三分の二は、一年以内に離職してしまっているとのこと。これは何故なのかと考えると、高等教育までは、困りの気づき↓合理的配慮による修学支援が行われているが

次の社会を見すえた移行支援がなされていないことによると考えられます。高等教育から社会へ出ていく時、環境の変化として求められることの変化があり、個人の変化として経験、意向手立て、目的などが考えられますが自己認識を高めていけるような支援が何より必要であると言えます。

では、自己認識とは何かというと、まず自分の障害特性を知ること、そして自分自身をマネジメントする力(自己管理)他者との相互関係の構築ということになります。

そこで大学での障害学生支援としてDEARセッションを立ち上げ、就労支援にかかわる事業所等と連携して「オンライン仕事体験」という取り組みを始めたとのこと。学生の中には、キャリアや就労は考えられないという学生も多く、小手先の対応では結果が出ないということも分かってきたのです。学生のハードルとして、仕事の進め方がわからない、インターンシップ(実務能力の育成や職業選択のために学生が一定期間、企業などで仕事を体験する制度)に不安がある、企業の求めるスキルレベル、自身の強みや弱み、興味関心がわからない等があげられました。

オンライン仕事体験は、メリットとして次の点があります。

- ・対象者を限定しない。
- ・企業での選考がないので準備しなくて良い。
- ・関係者との調整が不要なので支援者の手間がかからない。

・多くの対象者に機会を提供できる。

オンデマンド配信なので、インターネットップを提供しづらい企業でも仕事のプロセス、サンプルがいつでもどこでも提供でき、仕事インタビューでは一般版と障害者雇用版が用意されているとのことでした。

日本には、三万種の職種があり、三百六十七万社があるとのことですが、そのうちの九十八パーセントが中小企業だということ。京都府では、ジブパークとかはあとふるコーナーなど、ハローワークに行く前の総合就業支援もあるとのこと。就労に向けた様々な取り組みがなされていることを発表されていました。

大学での支援としては、やはり自己認識、自己理解という点だと言われます。ASDの学生は学力が高いからこそ就労の難しさがあるのです。自己理解とは自分と周りとの相互作用の中で自己のポジションや社会と自分との関係性を理解し、困難さを感じている環境について言語化していけることが大切なのでしょう。ただ感覚の問題、音におい、視覚刺激など、環境の問題やコミュニケーションなど難しい課題もあり、オンライン仕事体験はインターネットップと補完関係にある、ハードルの低い第一歩として考えていくことが必要なのでしょう。

発達障がい支援について

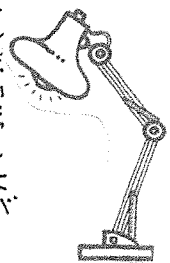
この講座については、発表者を記入し忘れてしまいました。私たちが知っておくべきことがありましたので、記述します。

発達障がい支援として考えるべきことは、①本人に対する支

援②周囲、特に保護者に対する支援(特性理解)③生活環境への支援(地域支援システム)の三点があります。

特に家族に関していえば、子どもの障害に対して、支援的に関わることが要求され、保護者自身もストレスを受けて精神的病理性を有する可能性があること、子どもの精神的変調の主たる心理的要因になりうるなどから、「二八の療育」が必要であると述べています。「二八の療育」とは、割合をさし、子どもの療育を二とし、家族支援を八とすべきであるという考え方です。わが子の発達目標に対する教育が課され、慢性的に家族がストレスを受けることへの心理的支援が必要であり、そのためには、療育者は成人期の精神医学や臨床心理学の知識が必要であるとも述べられました。

確かに、私たちは保護者の方に様々なアドバイスをしているのですが、そのことがストレスの要因の一つになっていることも多いので、うし、実際に心を病んでおられるご家族も身近にいらっしやいます。



お子さんの診断については、統計的に次のようなことが見られるとのことでした。

・診断は早い方が満足度が高い。見通しをきちんともつことが出来て、子育てに生かされた。

・医師に相談し、通院を続けていても診断されない場合は強いショックはないが慢性的なストレスが続く。

・一度「大丈夫」と言われると、支援が遅れるだけでなく、その後の自分の育て方が悪いのだと思ってしまう。

しかし、ADHDと診断されるのは嫌だが、「忘れ物やうっかりミスが多い」と、特徴を説明されると受け入れやすいというケースもあります。その場合、その特徴が持続すると認識しているかどうか。通常とは異なる苦手な領域があり、それは一生残るが、支援とは苦手なところの支援ではなく、得意なところの支援であると考えるべきだと述べられました。

この辺の保護者の認識はその後の子育てや、本人の自己理解にもつながっていくことだと私は思います。スマイルブックを作成し、支援の継続をしてきたにもかかわらず、本人には内緒にしている保護者の多さを知るにつけても、本人の自己理解の難しさを感じてしまいます。京大の村田先生の発表にあったように、困難さを自分で言語化していかなければ、保育

園時代のよう目目で訴えれば分かってもらえるなどということは通用しないのではないかと思うのです。小学校高学年あたりからの反抗期、思春期を経て、子どもたちは大人になっていきます。指示されたことを守るべきちゃんとやることを目標にして来ると、自分で考えたり、選択したりする力が育っていないことが多いものです。自己認識、自己理解についてももう一度考えてみましょう。

ところで保護者の方にも色々なタイプの方がおられますが、うつ病予備群タイプと言われる方は、社会的で面倒見がよく几帳面で責任感が強く仕事熱心で良心的……と一見非の打ち所のない、しっかり者という印象の強い方が多いと言われています。真面目な方なので周りもつい過度な要求をしがちになります。どうか無理をさせないであげてほしいと思います。一人で背負わなくて良いのですから……。

お知らせ

・12/28 3/4は休みます。

・センター親の会 1/16(ホミ) 2/13 3/13

・ひきこもり

不登校 家族会 12/16(金) 1/21(土) 2/18(土) 3/18(土)

ピアサポート 12/22・1/23・2/24・3/24

